

## 親の育児行動と母親の就労との関係

大 瀧 ミドリ\*・大 家 由利子\*\*

(昭和62年10月30日受理)

### 要 旨

本研究の目的は、母親の就労の有無あるいは家族形態の違いと親子との触れ合いの関係について明らかにしようとするものである。調査対象は、幼児をもつ父母各200名である。調査は、家事参加の状況、子どもへの養護的教育的関与の状況、子どもとの触れ合い、家事・育児・母親の就労等に関する意識の4つの内容について行う。

結果はつぎの通りである。

1. 家事の遂行は母親の就労および家族形態による影響は極めて少なく、母親に著しく偏っている。
2. 多くの父親が子どもに対して行なう養護的行動は「入浴の世話」のみである。
3. 父母のしつけの遂行者認識は不一致を生じている。
4. 子どもと父親が触れ合う頻度は母親に比して著しく少ない。
5. 家事・育児・母親の就労などに関する意識と実態のずれは父親よりも母親に大きい。

### KEY WORDS

working mother

母親の就労

housework participation

家事参加

pattern of family

家族形態

rearing behavior

育児行動

### 1. は じ め に

有配偶の婦人の就労率は、昭和50年に婦人の全就労者の50%を越え、それ以降も上昇傾向を示し、この傾向は今後さらに進むことが推察される<sup>1)</sup>。日本とイギリスの既婚婦人の就労率は非常に明確なM字型を示し、いわゆる子育て期に相応する25～39歳の年齢層の就労率が他の年齢層に比較して低いことが特徴である<sup>2)3)</sup>。しかし、近年ではその年齢層の就労率も上昇傾向を示しており、M字の切り込みがかなり緩やかになってきている。総理府が昭和57年に日本を含めて6カ国を対象に20～59歳の婦人の就労理由を調査している<sup>4)</sup>。日本の婦人の上位3位までの就労理由を見ると、「家計の維持」「働くことは当然」「自分の物を買うため」があげられている。これらの理由は、その順位が国によって多少入れ替わるものの、ほとんどの国で上位3位までに認められる理由である。では、母親が就労することが家庭的に何か問題を生みだしているのだろうか。この点について別の調査結果<sup>5)</sup>を見ると問題が「ある」と回答した比率が50%

\* 生活・健康系教育講座

\*\* 東京都大田区立出雲小学校

を越える国は日本と韓国である。他の国ではいずれも低く約18~35%にすぎず、「ない」とするものの方が高い比率を占めている。日本でも韓国でも母親が就労することによって生じる問題として「家事が不十分」「心身の疲れ」「子どものしつけ」などを上位にあげている。なぜ日本と韓国の働く母親がこのような不安を多く持っているのだろうか。先の国際比較調査<sup>6)</sup>により、家事の分担の様相を見ると、調査対象の日本、フィリピン、アメリカ、スウェーデン、西ドイツ、イギリスのすべての国で、家事は家族の特定個人に明らかに集中している。その特定個人とは、いずれの国においても母親である。しかし、母親に集中するその割合は、国によってかなり大きな違いがある。たとえば、日本の場合について見ると、母親に家事が集中する比率は6カ国の中で最も高く、約90%である。一方、最も低い国はスウェーデンであり、日本の約半分の50%程である。母親の次に家事参加を多くしているものを見ると、やはり国により差異がある。たとえば、家族全員でやるという比率が高いのはスウェーデン、アメリカ、イギリス、西ドイツであり、子どもが高い比率を示すのはフィリピンである。夫の家事参加に注目してみると、6カ国中で最も高い比率を示すのはイギリスの35%(含家族全員の比率)である。日本の場合には、母親以外の家族によって家事の分担がなされる比率はいずれも最低値を示し、0.8~3.5%にすぎない。母親が働くことによって生じる問題の解決方法としては、社会的レベルあるいは私的レベルでいろいろ考えられるであろう。その1つの方法に今、見たような家事の分担の仕方があるのではないだろうか。日本の家庭での母親以外の家族による家事参加率の低さそのものが、日本の母親の就労にともなう問題を発生させていることが推察される。そもそも家事は、衣食住を介して生命を維持し、成長・発達させることに直接に関わる行為である。また、その中には社会の継承行為として子を生み育てることも含まれている。本来的には、一人一人がそれらの行為を実践しうる能力と技術を習得することが必要とされるものである。にもかかわらず、この行為の遂行が家族の特定個人に偏って、他のメンバーがそれらのサービスの受け手として固定化されてしまうことは、家族のメンバーの基本的な生きる能力を奪うことにもなってしまうのではないだろうか。

伊藤<sup>7)</sup>は、日本の夫婦を対象として妻の就労形態別に家事的生活時間について見ている。伊藤のいう家事的生活時間とは「育児」と「衣食住等」に費やす時間を意味している。それぞれに費やす時間を見ると、「育児」には無職の妻が最長の1時間45分を費やしているのに対して常勤の妻は最短の30分であり、パートの妻は44分である。一方、常勤の妻の夫が「育児」に費やす時間は1日平均15分であるのに対して無職の妻の夫は6分であり、パートの妻の夫は4分である。つぎに「衣食住等」に費やす時間について見ると、常勤の妻は3時間7分、パートの妻は4時間37分、無職の妻は7時間20分である。夫について見ると、妻が常勤である夫の場合は25分、妻がパートの場合は8分、妻が無職の場合は6分を費やしているにすぎない。このように妻の就労の有無によって妻および夫の家事に関わる時間に大きな相違が見いだされる。ところで、1日平均4分ないし15分の父親と子どもとの接触の内容はどのようなものであり、また父子関係の形成にどのような意味を持つのであろうか。このことについては、日常的な父子の触れ合いと母子の触れ合いの比較の中で見る必要がある。現在では、母親が家にいて子どもの世話をし、父親が経済的な基盤をつくるというような父親と母親の役割をとる家庭が必ずしも当たり前ではなくなっている。

そこで本研究においては、父母がどのような役割をどのようにとっているか、その実態を明らかにする。さらに、母親の就労の有無および母親が就労している家庭の家族形態にも注目し

て、父親と母親の役割分業の実態と意識についても見る。

具体的には、次の観点から検討を試みる。

- 1) 父親と母親の生活時間と家事参加の状況
- 2) 父親と母親の育児参加の実態と意識
- 3) 母親の就業の有無と母親の育児参加
- 4) 母親の就業の有無と父親の育児参加
- 5) 母親が就業している家庭の家族形態の違いと父親と母親の育児参加の関連

## 2. 方 法

1. 調査対象：上越市内に在住し、幼稚園および保育園に在園する3～6歳の幼児を持つ父親と母親各200名
2. 対象の年齢：父親……平均年齢＝34.6歳（SD＝4.2），レンジ＝23～52歳  
母親……平均年齢＝32.2歳（SD＝3.7），レンジ＝23～45歳
3. 調査内容：a. 父親母親の生活時間について4項目，b. 父親母親の家事参加の実態について10項目（どのような家事を誰がどの程度行っているか），c. 父親母親の育児参加の実態について23項目（子どもの養護7項目，しつけ16項目），d. 父親と子，母親と子の触れ合いの程度について8項目（どんな遊びを誰とどの程度やっているか），e. 父親母親の家事参加・母親の就労・育児に関する意識について3項目
4. 調査方法および時期：園児を通して調査用紙の配布・回収を行う。  
調査時期は昭和61年5月である。
5. 回収率：幼稚園＝88.5%，保育園＝74.3%，平均回収率＝81.4%

## 3. 結果および考案

### 1. 調査対象の属性

#### 1) 家族形態

調査対象の家庭の家族形態について見ると60.6％は核家族であり，37.5％は祖父母などを含む直系家族が同居している大家族である。1.9％の家族形態は不明である。

#### 2) 母親の就労状況と職業

母親の就労状況を見ると48.5％のものは就労しており，同じく48.5％のものは就労していない。就労状況が不明なものが3％ある。就労しているものの職業をみると，会社員が最も高い比率（43.3％）を占め，ついでパートが高い比率（35.1％）を占めている。以下，公務員（14.4％），自営（6.2％），農業（1.0％）の順である。

#### 3) 父親の職業

父親の職業について見ると，母親と同様に会社員が最も高い比率（68.0％）を占め，ついで公務員が高い（16.5％）。以下，自営（10.5％），その他（5.0％），不明（1.5％）の順である。

## 2. 父親と母親の生活時間と家事参加の実態と意識

表1は、父親と母親の生活時間について見たものである。

表1 生活時間

生活 父・母別	起 床	出 勤	帰 宅	就 寝
父 親	6時36分	7時47分	19時 9分	22時13分
母 親	6時 3分	8時16分	17時31分	22時14分
t	* *	* *	* *	

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$

就寝以外の生活時間に有意な差が認められる。起床時間を見ると、母親は父親よりも約30分早く起きており、出勤時間は逆に母親の方が約30分遅い。そして、帰宅時間は母親の方が約1時間30分早い。これは就労している母親の約1/3のものが、パートであることによる。一方、就寝時間は母親と父親ともにほぼ同じである。それ故、母親の睡眠時間は父親に比較して約30分短いことになる。また、就労している母親が家庭に滞在する時間は、父親に比較して約2時間30分長いことになる。

母親の就労の有無と父親の生活時間の関係を見ると、起床、出勤、就寝等の時間には有意差はないが、帰宅時間に有意差が認められる。つまり、母親が就労している家庭の父親の方が有意に早く帰宅している。母親の場合は、就労の有無と生活時間の間に有意差はない。

また、母親が働いている家庭の家族形態との関係を見ると、核家族の父親の起床時間の方が早い傾向がうかがえる。母親については有意な差異は見られない。このように父親が家庭に滞在する時間は、母親の就労あるいは家族形態によって異なっているが、母親の在宅時間には家族形態による相違は認められない。

父親の職業との関係を見ると、公務員と会社員では公務員の方が有意に早く（約30分）帰宅している。

つぎに、父親と母親の家事参加の実態について見る。

父親の主たる家事参加は、「家具等の修理」のみで、これ以外の家事への参加は非常に低く、いずれも1割にも満たない。この実態は母親も認めており、父親と母親の受けとめ方に有意差は認められない。父親は、母親が家事をやっていると考えている以上に家事を多くやっていると考える傾向がある。一方、母親は自分一人でほとんどすべての家事を処理しているとしながらも、父親が考えている以上に父母以外の家族の家事参加を認める傾向がある。

つぎに母親の就労の有無と家事参加の関係について見る。

まず母親の就労の有無によって父親の家事参加がどのように違うかを見る。母親が就労している家庭の父親は「夜具の出し入れ」に有意に多く関わっている。しかし、他の家事については母親が就労していない家庭の父親との間に有意差はない。さらに、母親が就労している家庭の父親は、就労していない家庭の父親よりも母親の家事参加を有意に少なく見ており、その分、父母以外の家族の家事参加を有意に多く見ている。一方、就労している母親としていない母親の家事参加に有意差はない。つまり、母親が就労している家庭の父親は、母親が思っている程母親の家事参加を認めていない。一方、就労している母親は、就労していない母親と同じくらの家事を担っていると考えており、父母間に不一致を生じている。

母親が就労している家庭の家族形態と家事参加意識について見る。

誰が家事を担っているかを見ているかを見ると、核家族と拡大家族の父親に有意差が認められる。つまり、核家族の父親の方が母親の家事参加を多く見ており、拡大家族の父親は、家事は父母以外の家族の手によって担われていると考えている。そして、核家族の父親の方が「夜具の出し入れ」「室内の整理整頓」「家具等の修理」「ごみ処理」を、拡大家族の父親よりも有意に多く行なっていると考えている。母親の参加を見ると、「食事作り」「食事の後片付け」「ごみ処理」に有意差が見られる。いずれも核家族の母親の方が有意に多く参加していると考えている。

先に見たように、核家族の父親は、拡大家族の父親よりも多くの家事参加をしていると考えているが、核家族の母親は、父親が考えている程その参加を認めていない。

表2は家事分担に関する意識について見たものである。

表2 家事分担 (%)

父母別		意 見	賛 成	臨時的分担賛成	反 対	$\chi^2$
父	母	父 親	28.3	24.5	47.2	**
		母 親	45.4	26.5	28.1	
父 親	母 親 就 業		20.5	26.0	53.5	
	母 親 未 就 業		19.7	30.3	50.0	
母 親	母 親 就 業		51.3	21.8	26.9	*
	母 親 未 就 業		30.0	36.3	33.8	
母親が就労している	父親	核 家 族	21.4	39.3	39.3	**
		拡 大 家 族	20.5	18.2	61.4	
	母親	核 家 族	36.7	40.0	23.3	*
		拡 大 家 族	62.2	11.1	26.7	

\*  $p < .05$       \*\*  $p < .01$

父親と母親の考え方には有意な差異がある。つまり、父親は「家事は、母親の方が手慣れているから母親がやった方がよい」との理由で家事を家族で分担することに反対するものが多い。逆に、母親は「家事は家族全員で分担しあう方がよい」「家事は父親母親の手が空いているものがした方がよい」「家事の内容によって適不適があるから父親母親の負担が同じになるように分担した方がよい」との理由で分担に賛成するものが多い。

母親の就労の有無との関連で父親の考え方を見た場合、有意差は認められない。いずれの父親も分担に反対するものが多い。しかし、母親の場合には有意差が認められ、就労している母親の方が分担に賛成するものが多い。

また、母親が就労している家庭の家族形態との関連について見ると、父親では分担に反対するものは明らかに拡大家族の方に多い。核家族の父親は、拡大家族の父親に比して「母親が家の外の仕事で疲れていたり、体調が悪い時には父親が家事をする」というように一時的、臨時的処置として家事分担を考えているものが多い。母親では、拡大家族の方が分担に賛成するものが有意に多い。核家族の母親では、一時的臨時的な分担を希望しているものが多く、父親の考え方と類似している。しかし、分担賛成と反対の比率を見た場合には母親は分担を望み、父親は分担に反対しているものが多く、両者は逆の考え方をしている。このような分担に対する

考え方の違いは、核家族の父母よりも拡大家族の父母により明確に認められる。

先に見た家事参加の実態とここで見た家事分担の意識のずれは父親よりも母親の方に大きく認められる。つまり、母親は母親に家事が偏っている現状をよしとしないのに対して、父親はむしろ現実をよしと考えている。このような母親と父親の考え方のずれと母親の意識と実態のずれが前述の日本の母親の就業に伴う種々な問題を生じさせていることが推察される。

### 3. 育児参加の実態と意識

表3は、父親と母親の日常的な子どもの養護的側面への関わりの頻度を見たものである。

父親が最も多く関わっている養護行動は「入浴の世話」であり、その他のものについてはその比率が著しく低い。母親について見ると、最も高い比率を示すものは「保育園・幼稚園の送り迎え」である。ついで、「入浴の世話」が高い比率を示しており、この養護行動には、父親と母親の参加に有意差は認められない。

しかし、これ以外のすべてに父母間に有意差が認められ、父親に比して母親の方が有意に多く携わっている。父親の子どもへの関わりとして入浴が多いのは藤崎<sup>8)</sup>や大藪<sup>9)</sup>の結果とも一致するものである。この理由として、入浴は他の養育行動に比較してその遂行に時間的な融通をつけることができるものであり、さらに、子どもを入浴させる人とその後の世話をする人が、別人である方が何かと好都合であるという実際的な理由も関係して、父親の参加を多くさせていることが考えられる。

つぎに、母親の就労の有無によって、これらの養護的側面への父親および母親の関わりがどのように異なるかを見る。

母親が就労している家庭とそうではない家庭の父親には有意差は認められない。母親では、「衣服の着脱」は就労している母親の方が有意に多く関わっており、「保育園・幼稚園の送り迎え」は就労していない母親の方が有意に多く関わっている。

母親が就労している家庭の家族形態との関係について見ると、「保育園・幼稚園の送り迎え」「入浴の世話」「就寝の世話」は、核家族の父親の方が拡大家族の父親よりも有意に多く携わっている。母親では、「入浴の世話」以外のすべてに家族形態の違いによる有意差が認められる。核家族の母親の方が、多く関わっているのは「保育園・幼稚園の送り迎え」のみであり、他の5つのものは、拡大家族の母親の方が有意に多く関わっている。

表4は、男女の育児に関する適性についてどのように考えているかを見たものである。

父親と母親とでは育児における男女の適性について異なった考え方をしている。父親は「男

表3 日常生活における養護 (%)

養護内容の種類	関与の程度	す る			$\chi^2$
		す る	ときどきする	しない	
衣服の着脱	父	7.5	30.5	62.0	**
	母	46.5	23.9	29.6	
洗顔・整髪	父	13.0	29.0	58.0	**
	母	49.3	25.8	24.9	
排泄の世話	父	6.5	22.5	70.5	**
	母	34.7	15.5	49.8	
食事の世話	父	10.5	22.5	67.0	**
	母	54.0	13.1	32.9	
保育園・幼稚園の送り迎え	父	13.0	22.0	64.5	**
	母	78.4	8.5	13.1	
入浴の世話	父	51.5	32.5	15.5	
	母	62.4	26.8	10.8	
就寝の世話	父	13.5	33.5	53.0	**
	母	51.0	15.0	23.9	

\* p<.05      \*\* p<.01

表4 育児の適性 (%)

父母別		意見	男の育児否定	男女いずれも可	$\chi^2$
父		親	51.1	48.9	*
母		親	40.4	59.6	
父親	母親就業		47.4	52.6	
	母親未就業		51.2	48.8	
母親	母親就業		37.4	62.6	
	母親未就業		42.1	57.9	
母親就業	父親	核家族	42.9	57.1	
		拡大家族	49.0	51.0	
	母親	核家族	42.9	57.1	
		拡大家族	34.0	66.0	

\* p&lt;.05

の子が男らしく育つためには、父親が家事・育児を手伝わない方がよい」あるいは「手のかかる乳幼児の世話は母親の方が適性がある」との理由から男が育児に関わることを否定するものと「おむつを替えたり、ミルクを飲ませるなどの育児に関することは手慣れれば、母親でも父親でも誰にでもできることである」との理由から育児は、男女いずれにも可能とするものがほぼ同率である。家事分担と異なり、父親自身が育児に参加することを否定するものは少ない。つまり、現実の生活レベルではほとんど育児に参加していない父親も、意識のレベルでは育児に対してかなり積極的な考え方をしている。母親は、育児は男女いずれにも可能であると考えているものが多く、父親よりも有意に高い比率を示している。

母親が就労している家庭と母親が就労していない家庭の父親の育児参加の考え方に有意な差はない。母親においても有意な差はない。

また、母親が就労している家庭の家族形態との関連についても父親および母親のいずれにも有意差はない。

表5は、子育てと母親の就労に対する考え方について見たものである。

母親の就労については、父親も母親も同じように「母親は子どもが小さい時は育児に専念し、子どもが大きくなってから働く方がよい」と考えている。そのため母親の就労としては、M字型の就労が望ましいと考えているものが多い。

つぎに実際に母親が就労している家庭と就労していない家庭の父親について見る。母親が就労している家庭の父親は、「母親はできれば仕事と育児を両立した方がよい」「働いている母親の方が、生き生きしていて子どもに良い影響を与える」という理由で、母親が働くことを肯定しているものが多い。一方、就労していない家庭の父親は、M字型の就労を肯定するものが多い。就労している母親と就労していない母親では、やはり就労に対する考え方に有意な違いがある。つまり、就労している母親は就労を肯定するものが多く、就労していないものは「母親はできれば外で働かない方が、子どもに良い影響を与える」との理由で、母親が働くことを否定するものが多い。この結果は、父親も母親も自分の所属する家庭の状況を肯定するものが多く、意識と生活実態との一致度が高いことを示している。しかし、就労している母親の1/5の

表5 母親の就労と子育て(%)

父母別		意見	肯定	M型就業肯定	否定	$\chi^2$
父		親	23.2	44.3	32.4	
母		親	18.8	51.8	29.4	
父親	母親就業		34.6	38.5	26.9	*
	母親未就業		15.7	49.4	34.8	
母親	母親就業		32.6	47.2	20.2	**
	母親未就業		8.7	54.3	37.0	
母親就業	父親	核家族	32.1	35.7	32.1	**
		拡大家族	36.7	38.8	24.5	
	母親	核家族	23.5	58.8	17.6	
		拡大家族	38.5	38.5	23.1	

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$ 

ものが母親の就労を否定していることは注目に値する。

母親が就労している家庭の家族形態の違いによる有意差は、父親にも母親にも認められない。先に見たように、育児に関しては必ずしも父母は明確な性別役割意識を持っているわけではない。しかし、母親の就労と育児をからませた質問を行なうと母親が就労していない家庭の父母は、母親の就労としてM字型の就労を是認または就労を否定するものが多くなる。このことから母親が就労していない家庭の父母は、かなり明確な性別役割意識をもっていることが考えられる。アメリカでも母親の就労が典型的なM字型であった時があり、子どもの手が離れるまで多くの母親が育児に専念していた。そして、母親が育児に専念している間に、母親中心の養育行動が家庭の中に確立してしまうため、子どもの手が離れて母親が就労した後も、子どもの世話や夫婦の関係など何もかわらず、そのままの関係が続いてしまっていたことをペダーセン<sup>10)</sup>は指摘している。つまり、M字型の就労は、母親が家事・育児に加えて仕事をかかえこむだけで何ら家族の性役割に変革を生みださなかったというわけである。ところが、子どもが乳児の時から母親が就労している場合は、否応なしに父親も育児にまきこまれることになりやすい。もっとも、子どもの手が離れてから母親が働く場合に、父親母親の役割に何も変化が生じなかった理由としては、ペダーセン<sup>11)</sup>は、その他の理由も指摘している。その1つは、社会が若い母親には母親としての新しい役割を取り入れるために多くの援助をするが、父親に対する援助はわずかであること。さらに、一般的に父親の役割として、家族の生活を維持するための経済的な保障をする役割だけが強調されすぎるために、父親自身が経済的側面以外においても自分が重要な人物であるという信念を維持することがほとんど不可能に近くなっていること。さらに、ラム<sup>12)</sup>も心理学、教育学、社会学の研究結果が、子育てにおける母親の役割を強調しすぎる(親=母親であるかのような錯覚を与えてしまった)ため、子育ての場から父親を締めだす結果になっていることを指摘している。

本来、人間関係は互いの役割が固定化されておらず、可塑性可変性の有る方がそのメンバーの能力が活かされ、集団としての機能も高まるわけである。何故、家族集団だけが性役割が固定している必要があるのだろうか。このことに関してシャファー<sup>13)</sup>や木村<sup>14)</sup>は、子育てにおける親の役割として父母が持つ性を越えた、性的にはニュートラルな親性について問う必要性を指摘している。



## 4. しつけ

表6は、しつけの担い手について見たものである。

表6 しつけの責任(%)

主たる責任者		母 親	同 程 度	父 親	父母以外の家族	$\chi^2$
しつけの内容						
食 事	父	69.5	22.0	5.0	3.5	*
	母	75.1	15.5	1.9	7.5	
排 泄	父	85.5	5.5	1.5	7.5	
	母	85.4	4.2	0.5	9.9	
おもちゃの後片付け	父	70.0	15.5	2.0	12.5	
	母	70.0	10.3	0.5	19.2	
テレビを見る時間	父	62.8	19.9	8.7	8.7	
	母	64.6	20.3	6.6	8.5	
お 手 伝 い	父	72.5	19.0	4.0	4.5	
	母	74.2	15.0	2.8	8.0	
叱 る	父	40.5	42.5	15.0	2.0	**
	母	50.7	35.2	7.5	6.6	
ほ め る	父	38.0	51.0	8.5	3.0	**
	母	46.9	43.2	2.3	7.5	
男 ら し さ	父	28.6	33.8	30.8	6.8	**
	母	26.0	23.8	21.0	29.3	
女 ら し さ	父	60.6	22.7	5.3	11.4	**
	母	45.6	14.4	1.7	38.3	
知 的 面	父	56.6	32.8	6.1	4.5	*
	母	62.4	27.7	1.9	8.0	
情 操 面	父	58.3	30.7	7.5	3.5	
	母	56.6	29.7	4.2	9.4	
体 力	父	30.9	35.1	30.9	3.1	
	母	35.1	32.7	24.6	7.6	
友 達 遊 び	父	61.9	29.9	1.0	7.1	*
	母	66.2	21.1	0.0	12.7	
清 潔	父	72.1	22.3	2.5	3.0	
	母	75.1	14.6	2.8	7.5	
衣 服 の 着 脱	父	87.5	6.5	0.0	6.0	
	母	85.4	7.0	0.5	7.0	
就 寝	父	79.2	12.2	2.5	6.1	
	母	81.2	11.3	2.3	5.2	

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$

16項目中7項目に母親と父親の判断に有意差が認められる。つまり、これら7項目については、母親が担い手であると思っている程には、父親は認めておらず、また、逆に父親が関わっていると考えている程には、母親は父親の参加を認めていない。特に、この傾向は、叱る、褒める、男らしさ、女らしさのような道徳的および社会的意味合を持ったしつけに多く認められる。

一方、母親と父親のしつけの担い手について、有意差のないものは16項目中9項目ある。その中の1つである「体力をつける」は、母親も父親も同程度の関与を行なっているととらえているが、残りの8項目は、母親も父親もその担い手はともに母親であるとしている。しかし、

「情操面のしつけ」については母親であるとする比率は高いものの、父母の約1/3のものが父母同程度に関与しているとして父親の関わりを多く認めている。ともあれ、父親と母親の判断が一致しているしつけの内容は、排せつやお手伝いやテレビの視聴などのように、日常生活に密着したしつけである。

つぎに、母親の就労の有無との関係について見る。

母親が就労している家庭と就労していない家庭の父親に、有意差のあるものは16項目中7項目あり、それらは「食事」「排せつ」「おもちゃの後片付け」「テレビ」「体力つける」「友だちとなかよく遊ぶ」「衣服の着脱」である。他の9項目には顕著な差は見られない。有意差のあったものの中「体力をつける」以外のものは、母親が就労していない家庭の父親の方が、しつけの担い手は母親であるとみなしている。一方、母親が就労している家庭の父親は、自分がしつけをしていると考えている。ただし、「体力をつける」は、母親が就労していない家庭の父親は、母親と同程度に関与しているとするものが多い。

母親について見ると、16項目中8項目に就労している母親と就労していない母親の間に有意差が認められる。8項目は「排せつ」「おもちゃのあと片付け」「テレビ」「叱る」「知育」「友だちとなかよく遊ぶ」「清潔」「衣服の着脱」である。これらのすべてにおいて就労していない母親の方に、自分がしつけの担い手であるとしているものが多い。

母親が就労している家庭の家族形態と父親のしつけ者としての関係を見ると、16項目中2項目に有意差が見い出される。1つは「排せつ」であり、核家族の父親はその担い手は母親であると考えているのに対して、拡大家族の父親は父母以外の家族であるとしている。他の1つは「男らしさ」であり、核家族の父親は、母親も自分も同じように関与していると考えているが、拡大家族の父親は、その役割は自分がとっていると考えているものが多い。

また、母親について見ると16項目中5項目に有意差が認められる。核家族の母親は「排せつ」「おもちゃのあと片付け」を自分がしつけしていると考えているものが多い。また、「知育」「叱る」「友達となかよく遊ぶ」については核家族の母親は、父親と同程度のしつけの役割を担っていると考えているものが多い。核家族の母親に比較して拡大家族の母親の方がしつけに関わることが少ないのは、父母以外の家族によって担われているためである。

## 5. 子どもとの触れ合い

表7は、子どもとの触れ合いについて見たものである。

父親の半数を越えるものは、子どもと「話をする」というように言葉を介した触れ合いを毎日もっている。その他「おもちゃ遊び」「運動的遊び」「本を読む」「散歩」などによる触れ合いを週に数回持っている。

母親についてみると、やはり「話をする」ことによる子どもとの触れ合いが最も多い。ついで「本を読む」「運動的遊び」「音楽遊び」「散歩」「おもちゃ遊び」「ごっこ遊び」などが多い。これらの遊びについては、父親との間に有意差がある。

つぎに母親の就労の有無と家族形態との関係について見る。

母親が就労している家庭と就労していない家庭の父親に有意差は認められない。しかし、母親については「運動的遊び」「本を読む」「音楽遊び」「散歩」に有意差が認められる。いずれの遊びも就労していない母親の方が子どもと多く遊んでいる。

また、母親が就労している家庭の家族形態との関連を見ると、「おもちゃ遊び」は拡大家族の

表7 遊びの頻度(%)

遊びの種類 \ 頻度		毎 日	週に数回	な い	$\chi^2$
おもちゃ遊び	父	14.5	41.5	44.0	*
	母	28.2	39.4	32.4	
運動的遊び	父	11.0	48.5	40.5	*
	母	23.0	49.3	27.7	
本を読む	父	7.0	45.0	48.0	**
	母	25.8	58.7	15.5	
話をする	父	57.5	33.0	9.5	**
	母	83.1	12.3	4.7	
音楽遊び	父	8.0	31.0	61.0	**
	母	21.6	50.2	28.2	
ごっこ遊び	父	5.5	35.0	59.5	*
	母	16.9	38.1	45.1	
創作遊び	父	1.5	24.5	74.0	
	母	2.8	37.1	60.1	
散 歩	父	1.5	45.5	53.0	**
	母	11.7	57.2	30.9	

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$ 

父親の方が有意に多く関わっている。他については、家族形態の間に有意差は認められない。母親について見ると、「散歩」にのみ有意差が認められ、拡大家族の母親の方が子どもと散歩する機会が多い。5%水準で有意差は認められないが「運動的遊び」も拡大家族の母親の方が多い傾向が認められる。

ラムは<sup>15)</sup>、父子の遊びは身体的な運動遊びが多く、母子ではことばを使う遊びや道具を使う遊びが多いことを見い出している。しかし、クラークスチュワート<sup>16)</sup>は、父子と母子における遊びの差異よりもむしろ類似性を多く見い出している。彼は、応答性、刺激、愛情、有能さ、子どもへの態度、独立性、教え方は父母共に類似しており、社会的遊びを除く行動の内部相関のパターンも類似していることを見い出している。

本結果では、父親と母親がそれぞれ子どもと触れ合う遊びの頻度には明確な差異が認められる。しかし、内容的には両者の関わり合いは類似しており、ラムの指摘するような明確な役割分化が、父母間にあるとはいいがたい。

#### 4. お わ り に

幼児を持つ両親を対象として、家事および子育てへの関わりについて見てきた。当初から予想されたように、家事および子育てへの父親の参加は著しく低い。ただし、母親の就労あるいは家族形態に注目した場合には、父親の参加も多少増える傾向が認められる。しかし、その場合でも父親と母親の関わる比率はかなり母親に偏っている。このような実態を生み出す背景に

は、家事に対する父母の意識が関与していることが明らかとなる。つまり、父親は「家事は母親の方が手慣れているから母親がやった方がよい」と考えており、それを生活実践しているのが現状である。これは、樋口<sup>17)</sup>の「女の子」はつくられるとの指摘を待つまでもなく、経験の違いを分担の違いとするものである。この考え方の中には、もし、男にも家事に手慣れる場が与えられるならば、父親と母親の役割の入れ替えが可能となることが含まれていると考えてよいのではないだろうか。つまり、この理由からは、母親が家事を負い込む必然性は生まれてこない。大藪<sup>18)</sup>は家事・育児に積極的に関わっている父親について面接調査した結果、家事・育児に積極的に関わるか否かと父親の生育史における家事・育児の経験の多少とが正比例することを見い出している。つまり、現在、家事・育児に積極的に参加している父親の場合は、彼の父親が、家事に参加しないのが普通であった当時の父親よりも多くの家事参加をしており、また当時、子どもであった彼等自身も家事参加の経験をかなりもっていたということである。このように家事をする父親のモデルを持っていたこと、さらに、自分自身が子ども時代に家事参加の経験を多く持っていたことが、結果的に彼等自身が夫や父親になった時に、家事参加を容易にしたものと考えられる。

つぎに、育児について見ると本結果では、父親の育児参加を否定するものと肯定するものがほぼ同率であり、育児は男にも女にもできるとして肯定する率は、男の家事参加をよしとするものよりも高い。しかし、ここでも手慣れればという条件付きである。ところで、育児に父親が参加するためには、子どもと物理的に関わるものが絶対必要条件である。しかしながら、帰宅時間が働く母親よりも有意に遅い現状では、子どもと関わる時間の確保そのものがかなり難しいことが指摘されよう。ところで、大藪の結果では家事・育児を分担している父親のほとんどが公務員などの比較的拘束される時間が安定している職種のものであるという。本対象についても公務員と会社員の帰宅時間を比較すると、公務員の方が有意に早く帰宅しており、公務員の方が他の職種の父親よりも在宅時間が長い。しかし、大藪の結果とは異なり、家事・育児の参加において両者の間に必ずしも有意な差は見いだされない。このことは、生活実態において父親が育児に参加することが少ないのは単に時間的な余裕だけではないと考えられる。父親が育児に関わることの必要性は指摘されながらも日本の社会では必ずしも日常化していないのは、1つには父親母親の役割が性別役割と結びつき、父親自身の参加を抑制していることも考えられる。このような性別役割を超えるためには、ペダーセン<sup>19)</sup>が指摘するように父親に対しても、母親に対しても同じように親たるための社会的働きかけが必要なのではないだろうか。その場合、性別役割を前提とした親の役割ではなく、シャファー<sup>20)</sup>の指摘するようにマザーリングを「機能」ととらえる視点をもたせておくことが、重要であろう。つまり、父親と母親の役割の違いは、親の機能を果たすために関わる父母の個性の違いによって生じると考えることが必要であろう。今後、子どもの社会性の発達に関してはこのような視点から父親母親の役割を考えていくことが必要となろう。

## 謝 辞

調査にいろいろご便宜をいただきました春日幼稚園、大曲保育園および高志保育園の園長先生および諸先生そして調査にご協力いただきました園児のご両親に衷心より感謝を申し上げます。

なお、資料の集計等には JEPS を使用した。

#### 註

- 1) 労働省婦人局編 「婦人労働の実情」 大蔵省印刷局 1984
- 2) 前掲書 1)
- 3) 小木曾 英一監修 「80年代 女性の生活」 日本放送出版協会 1983
- 4) 総理府婦人問題担当室監修 「婦人の生活と意識」 ぎょうせい 1984
- 5) 総理府青少年対策本部編 「青少年と家庭」 大蔵省印刷局 1982
- 6) 前掲書 4)
- 7) 伊藤セツ他 生活時間 光生館 1983
- 8) 藤崎真知代 乳幼児における父子関係 「女性と文化III」 JCA 出版 145-168, 1984
- 9) 福岡・女性と職業研究編 「家事・育児を分担する男たち」 現代書館 1982
- 10) F. A. ベダーセン 依田 明監訳 「父子関係の心理学」 新曜社 1986  
(*The Father-Infant Relationship*, New York: Praeger 1980)
- 11) 前掲書 10)
- 12) M. E. ラム 久米 稔他共訳 「父親の役割」 家政教育社 1981 (*The Role of the Father in Child Development*, New York: John Wiley & Sons 1976)
- 13) R. シャファー 矢野喜夫他共訳 「母性のはたらき」 サイエンス社 1983 (*Mothering*, Cambridge, MA: Harvard University Press 1977)
- 14) 木村 栄 「父親の自立と子育て」 汐文社 1982
- 16) K. A. クラークスチュワート 前掲書 10) 127-164
- 17) 樋口恵子 「女の子の育て方」 文化出版局 1978
- 18) 前掲書 9)
- 19) 前掲書 10)
- 20) 前掲書 13)

## Child Rearing and Parents Life Style

Midori OTAKI and Yuriko OIE

### ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relation between child rearing and parents life style especially family patterns and if mother was working or not. The subjects were 400 parents whose children were attending a Kindergarten or a day care center. There were 97 working mothers and 97 nonworking mothers out of 200 mothers. The questions from the following 4 areas were asked : 1) housework participation 2) child caring 3) child training 4) playing with the child.

The results were summarized as follows :

1. Almost no fathers did any housework.
2. Most fathers didn't do any child care except giving a bath to the child.
3. There was a different point of view between the mothers and the fathers with regards to who was training the child. The mothers didn't think fathers participate in it as much as they think. And the fathers didn't think the mothers did as much as they think.
4. The fathers played with their child far less often than mothers.
5. The fathers in nuclear family with the working mothers participate in the 4 activities above more often than the ones in other family situations, however far less often than the mothers.